

優秀賞

マンゴーよりもハグ

北海道札幌国際情報高等学校 1年

吉村 咲子

私は、幼少期の三年間を、父の仕事の関係でフィリピンの首都マニラで過ごしました。それから、はや十年が経とうとしています。

当時の幼かった私にとって、今でもずっと記憶に残っている出来事があります。それは、私が母と一緒に、市街地で売られている野菜や果物を買に行ったときのことでした。一人の少女が、道端に座って、私と母をじっと見つめていました。少女は、当時の私と変わらない年齢のように見えました。身体は栄養が足りておらず、やせ細り、洋服は何年着てきたか、わからないようなものを身につけていました。少女の側には、少女の親にあたる大人はおらず、たった一人でそこに座っていました。私の母は、少女と目が合うと、その少女を心配し、お店で買った一つのマンゴーを手渡しました。すると、少女はマンゴーを受け取らずに、私の母に、ぎゅっときつく抱きつきました。母は、それを受けとめ、しばらくの間、少女を優しく抱え込んでいました。少女は、目に涙をうかべながら、

「Ayokong maghiwalay」

と、タガログ語で「離れたくない」と言っていました。私にとって母がいることはあたり前のことですが、その少女にとってはあたり前ではない、という現実を知り、当時の私は胸が痛みました。

今、改めて振り返ると、その少女は「愛」に飢えていたのです。私は今まで、そして今も両親に愛され、祖父母に愛され、親戚に愛されて育ってきました。そしてそれを疑うことなく、この十五年間を生きてきました。しかし、その少女は「愛」を受けとることのない環境におかれ、ただ一人、世界の中で孤独を感じて生きていたのです。もちろん、少女は食べ物にも飢え、お腹を空かしていたことでしょう。しかし、食べ物よりも何よりも、「人のあたたかさ」「愛」に飢えていました。自分の隣で一緒に話してくれる人、寄り添ってくれる人、ただ、それを必要としていたのです。自分を大切にしてくれる人や、頼ることのできる人がいない「寂しさ」とは、一体、どのようなものなのでしょう。私には、到底計り知れないものです。自分が存在することの価値や意味までもが、失われてしまいそうです。

現在、フィリピンには約二十五万人ものストリートチルドレンが、存在しています。毎日裸足でゴミ山へ行き、食べ物を買うためのお金を集めたり、中には犯罪に手を染めたりする子どもたちもいます。そうせざるを得ない状況におかれてしまっているのです。彼らには、頼りになるもの、安心して生活ができるような家はありません。日々、恐怖と不安を感じながら、生活を送っているのです。そんな彼らのために、今一番必要なことは何か、真剣に考えました。

その答えは、「心のケア」です。いつのときかマザーテレサは言いました。

「一切れのパンではなく、多く的人是愛に、小さなほほえみに飢えているのです。」

私はこの言葉を目にしたときに、フィリピンでの出来事が、思い出されました。食料や物資は、お金で買うことができますが、「愛情」は人から生まれるものであり、決してお金で買うことはできな

いのです。私たちに求められていることは、お金で解決されるものではなく、私たち自身が、実際に現地に赴き、子どもたちと会話を交わしたり、一緒に遊んだり、本を読んだりすることだと思えます。私たちは、まずはじめに、何を支援する必要があるのかを、もう一度考えることが大切です。彼らにとって、心の支えとなるものやよりどころとなるものを提供すること、これが一番必要なことではないでしょうか。私がフィリピンで出会った少女のように、「愛」「人のあたたかさ」に飢え、孤独を感じている子どもたちが、少しでも幸せを感じ、笑顔になれる日を私は心から願っています。